Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

明治20年代における子どもの歌に関する考察［1］
—保育における唱歌教育開始のための様々な試み—

嶋田　由美
（大阪女子短期大学）

1．はじめに

明治初頭に我が国に近代学校教育制度が採り入れられて以来、学校教育の場でどのような音楽を子どもたちに教授していくべきかということは大きな問題となり、学校教育現場のみならず、音楽界をも巻き込んでの試行錯誤が繰り返され、明治期の音楽教育の方向性が探られて行くことになる。この状況は幼児教育の場においても同様であったと考えられる。どのような歌を用いて幼児教育を推進していくのかということは、近代学校教育制度の確立にも大きな影響を及ぼすものであったはずである。

とりわけ明治20年代は大都市を中心として次第に幼稚園教育が展開されていきそうな様相を前にして、この問題と真剣に取り組まなくてはならない時期であったと言えよう。この頃には文部省音楽取調掛、その後の東京音楽学校を中心とした西洋音楽教育の成果により、子どもの歌を創作し得る能力のある人々が活躍し始めたこともあり、幼児教育を想定した唱歌集の編纂なども開始される。従って、この時期に子どもの歌の創作や唱歌集の編纂に携わったり、或いは幼児教育の場で子どもの音楽教育に関係した人々がどのような音楽教育観を持ち、その上に立ってどのような音楽を創作して幼児教育の場に提示しようとしていたのかを探ることは、その後の我が国の子どもの音楽教育の根幹を解明するという意味で重要な課題であると考えられる。

本研究はこのような問題意識に基づき、その研究の端緒として、明治20年前後に編纂発行された幼児教育を対象とした唱歌集をいくつか採りあげ、この時期、子どもの音楽というものがどのように捉えられていたのか、幼児の教育に音楽を用いることに対しどのような問題が存在し、その解決のためにどのような方法が採られ、子どもの歌が創作されていったのかという点に焦点をあてて考察を試みるものである。

2．明治20年前後の保育のための唱歌観

幼稚園教育に用いるための唱歌集としては、『保育唱歌』以降のものでは明治20年12月に文部省音楽取調掛が編纂発行した『幼稚園唱歌集』が主たる教材として挙げられる。

しかし実際には官製の『幼稚園唱歌集』が刊行される前後に既に音楽界では何種かの保育のための唱歌集の作成が試みられていたことが明らかである。それらの唱歌集所載の唱歌を通して、西洋音楽を作曲するという能力の未だ乏しかった当時、様々な方法で保育に供する歌を創り出そうとしていた様相が見受けられる。

その様々な試みに共通した考え方は、子どもが日常的に歌っている歌、いわゆる里謡の類の歌を排斥するということであった。例えば明治18年に発行された『幼稚園初歩』の「唱歌」の項目で、「我国にも音楽唱歌あり、されど其の調、其の歌、大抵鄙俚に渉りて幼稚保育の料となすべからさるもの多しとぞ」[1]と述べられていたように、我が国で古来歌われてきた歌は保育に相応しくないと考えられたのである。これは明治10年代後半から20年代初頭にかけて一般社会において盛んとなった猥歌追放の運動と密接に関係したものであったと言えよう。

さらにまた、河井源蔵原版の『軍歌』（明治19年）の出版に端を発した一連の軍歌の流行に対し、「今の童の軍人の唱へる軍歌と伝ふ者を真似て唱へるなも幼稚き児童にふさわしからず」[2]という意見も見られた。

そしてこのような里謡や軍歌の排斥という趣旨にそって明治20年代には、小学校教育用の唱歌の転用、数えうたを主とする里謡の改良、新たな保育用唱歌の創作、西洋の楽曲の受容など様々な方向から保育のための唱歌の編纂発行が試みられた。

小学校教育用の唱歌の転用という点に関しては、先述の『幼稚園初歩』の中でも文部省音楽取調掛編纂の『小学唱歌集』から数曲が、楽譜も添えて紹介されており、唱歌教材が未だ少なかった当時、『幼稚園唱歌集』の発行以降も幼稚園における唱歌教授に『小学唱歌集』所載の唱歌も頻繁に用いられていたのではないかと推察される。そして実際に明治30年代に入っても幼稚園での保育に『小学唱歌集』中の唱歌を採用している旨の報告も見られる。[3][4]

3．保育における「数えうた」

ところで唱歌教育の黎明期には子ども達が耳慣れている一つとやに始まる「数えうた」のメロディーに修身教育的な

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

内容の歌詞を付けて、ともかくも唱歌教育を開始しようとする傾向が顕著であったが[5]、この傾向は保育の場においても同様に見られた。里謡の排斥は明治期唱歌教育のいわばスローガンであったが、西洋音楽が導入されて間がない時期の唱歌教育の普及のためには、唱歌教育の必要性の認知を図ることが先決であり、その手段として子どもが聞き知っている「数えうた」のメロディーだけを用い、あらたに教育的な歌詞を付けるという方法を講じたのであった。『幼稚園唱歌集』の中にも「数えうた」は収められているが、明治20年発行の『幼稚唱歌集』『幼稚園小学校こども歌』などに掲載された「数えうた」のほとんどは、『幼稚園唱歌集』所載のものではなく、福羽美静のオリジナルな歌詞によるものであった。

その歌詞では親の恩を忘れず、人の道を大事にすることを説くとともに、「三ツとや　三ツ四ツ五ツのおさなごがおさなごが　知識を育つる幼稚園幼稚園」というように、幼稚園教育の必要性が謳い込まれていた。

このように里謡排斥の趣旨の中で唯一例外として広く扱われた替え歌詞の「数えうた」は、子どもに口ずさまれることも多く、唱歌教育普及のためのみならず、幼稚園教育の必要性の認知のためにも貢献を期待されるものではなかったかと推察される。

4．『明治唱歌幼稚の曲』の出版

一方、明治21年には大和田建樹と奥好義の編纂になる『明治唱歌幼稚の曲』の第1集が、翌年にはその第2集が発行されるが、この唱歌集は先述の『幼稚園唱歌集』や「数えうた」を含む唱歌集などとは全く趣を異にする唱歌集であった。編纂の意図は明らかではないが、「まえがき」に見る限りにおいては教育の場よりも家庭生活の中で歌われることを目的として編纂されたと考えられる。しかし実際の幼稚園教育の場でこの唱歌集所載の歌が扱われることも多かったようであり、明治20年代の幼稚園唱歌教育にとって重要な位置を占める唱歌集のひとつであったと考えられる。この『明治唱歌幼稚の曲』所載の各曲においては、他の唱歌集が教訓的な内容の歌詞を多く載せていたことと比べ、昆虫や小動物など子どもの身辺から題材を採っていたこと、楽曲が跳躍音程を含んでいたり音域が広いなど、いわば純粋歌曲のスタイルのものが多いのが特徴的であった。幼稚園教育の場でという意図が明確にされていなくても、このような唱歌は当時、新鮮さをもって保育の中で受け止められたのではないかと推察される。

5．『小学唱歌』に見られるわらべうた導入の試み

『明治唱歌幼稚の曲』が歌詞の側面で子どもの身近な題材を扱っていたのに対し、音楽面では明治25年に伊沢修二が編纂発行した『小学唱歌』がわらべうたを採り入れるなど、里謡排斥の風潮の中であえて古来の音楽を使うという新しい唱歌集のあり方を模索するものであったと言えよう。『小学唱歌』と言う唱歌集名でありながら「幼児」をも十分意識した内容を持つこの唱歌集の編纂にあたって伊沢は、「からすからす」「かりかり」など忠孝や「長幼愛敬の道」を説く歌詞を持つようなわらべうたや、「宮さん」のような流行歌の類の子どもの生活の中にある音楽をも積極的に採り入れて唱歌教育の普及を図ろうとしたのであった。おそらく伊沢は、同じ様な修身教育的な歌詞内容を教え込むのにも、より子どもの実生活に近い音楽を使った方が有効であるという考えに基づいてこの『小学唱歌』を編纂したものと考えられる。

6．おわりに

このように幼稚園教育開始の当初にあってはどのような唱歌を用いて音楽教育を行うかということには、様々な考え方が混在していた。実際には、文部省音楽取調掛編纂の『幼稚園唱歌集』の編纂発行をもってしても、この時代の保育における唱歌教育の方向性を定めることはできず、保育の現場では種々の唱歌集から唱歌を採用し、保育に採り入れようとしていた様相が伺われる。それは音楽界にとっては新しい唱歌集の相次ぐ出版という活況を招くことに繋がってはいたが、反面、保育の場においては未だ音楽の素養の乏しかったと思われる当時の保育者に唱歌の選択眼が備わっていたのか、果たしてどの程度の音楽教育が可能であったのかという問題も提起される。今後はこの当時の保育者の音楽的能力という側面からも考察を進め、この問題を解明していくことを課題としたい。

〈註〉

1）飯島半十郎著　p.41

2）「はしがき」（兎道春千代著『小学校幼稚園生徒修身運動歌』明治20年3月）p.3

3）「西区各幼稚園唱歌種類」（『京阪神聯合保育会雑誌』第2号　明治32年4月15日）等参照。

4）一方、明治30年代半ばまで小学校唱歌教育において『幼稚園唱歌集』所載の唱歌を教材として用いることも多かった。拙論「明治期唱歌教授細目の研究」（『大阪女子短期大学紀要』第23号　平成10年12月　pp.35-48）参照。

5）拙論「明治期小学校唱歌教育における「数えうた」の研究―歌詞内容の分類と唱歌教授細目の分析を通して―」（『大阪女子短期大学紀要』第19号　平成6年12月　pp.25-36）参照。

NII-Electronic Library Service